

二〇二六年度

二月一日午前入試

国語 (45分)

注意

- 1 開始の「チャイム」が鳴るまでは、中を見てはいけません。
- 2 答えはすべて解答用紙の解答らんに、はっきり書きなさい。
- 3 終わりの「チャイム」が鳴ったら、とちゅうでもやめなさい。
- 4 問題のページは、1-1 から 1-14 まであります。

— 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。(字数制限のある場合は、句読点や記号も字数に数えます。)

平成十三(二〇〇一)年の大阪。不登校となり、中学校を卒業できなかった二十歳の潤間さやかは、生きづらさをかかえながらアルバイト生活を送っていたが、ふとしたことから夜間中学校の存在を知り、この学校に入学して通うこととなった。

「うちの学校、正式には『河堀中学校夜間学級』って言うやんね。頭ではわかってるんやけど、何か馴染めないっていうか……。」

美術の授業中、向かい合って互いにスケッチしながら、さやかが遠見に話しかける。

① 夜間中学に入学して三か月近く、学校生活にも漸く慣れて、色々なことに目を向けられるようになった。仲間たちへの理解も、徐々に深まりつつある。

親しくしている落子が、中国残留孤児[※]だったということ。生徒の中には、落子と同じ境遇の者や、その家族として日本に移り住んだ者が、ほかにも大勢いること。正子ハルモニのような在日韓朝鮮人のひとりたちも、河堀夜間中学には数多く在籍すること。それぞれが、夜間中学に辿り着くまでに、大変な苦労を重ねていることも、慮れるようになった。

ただひとつ、納得のいかないことがある。

この学校には、一年から三年まで全部で十二のクラスがあって、四百人近くが在籍している。それを全部ひっくるめて「学級」と呼ぶことに、さやかには妙な違和感があった。

② うむ、と遠見が深く頷く。

『河堀夜間中学』、略して『河堀夜中』でええと思うで。そっちの方がしっくりくるし。」

あら、と生徒の間を見回っていた美術の教師が、さやかのスケッチを見て立ち止まった。

「よく描けてるわ。遠見さんの特徴を上手く捉えてる。」

どれどれ、と周囲の同級生たちも、さやかのスケッチを覗き込み、「上手いもんや。」「よう似てるわ。」と口々に褒めそやす。

突然、健児が腹を抱えて笑いだした。

「これ見てみ、親父さんの描いたスケッチ。」

遠見の手から画用紙を取り上げて、健児はさやかに示した。

怪獣か、はたまた妖怪か。

目らしきもの、鼻らしきもの、口らしきものがバラバラに散らばり、もはや抽象画の域だった。壮絶ないラストに、さやかは「これ、私か？ 私なんか？」と自問して、絶句するしかない。

③ 「わしのこと、『東洋のヒカン』[※]て呼んでくれてもええで。」

まんざらでもない口調で、遠見は胸を張っている。

美術の後は、皆が楽しみにしている補食の時間だった。いつものように、机同士を寄せ合い、慎ましい食事を楽しむ。

「さやかちゃん、ええ加減に機嫌なおしてえな。」

④ ほれ、牛乳やるさかいに、と遠見から牛乳を差し出されるが、さやかはへそを曲げたままだ。

「スアンちゃん、遅いねえ。」

密閉容器を抱えて、露子が教室の出入り口を気にしている。

さやかと一緒に入学したグエン・ティ・スアンは、普段は一年一組で学ぶが、英語と補食の時間はこの二年三組で過ごしていた。

「スアンちゃんの好物の海老入り小籠包、今日は仰山、作ってきたんよ。早う食べさせてあげたいんやけど。」
ずらした蓋から、小ぶりの小籠包が覗いている。

「あ、私、呼んでくるね。」

さやかは言って、席を立った。

河堀夜間中学では、定期的に全校集会があるし、同じ学年なら合同授業もある。けれど、学年が違うと、教室を覗くことも授業風景を見ることがほとんどない。^⑤ さやかにとっても、一年一組の教室を訪ねるのは、初めてだった。

三階の一番奥の教室。

廊下の窓から覗くと、まだ授業の最中だった。国語の担任だろう、黒板にチョークで文字を書いている。一年一組は識字クラス、即ち、日本語を読めること、書けることを可能にするためのカリキュラムが組まれている、と聞いていた。

スアンの他に、[※]ニューカマーと思われる生徒が数人。しかし、圧倒的に多いのが白髪交じりの年配者たちだった。

『あ』『お』『ぞ』『ら』。これで『あおぞら』と読みます。はい、一文字ずつ、声に出して読んでみましょう。』

「あ・お・ぞ・ら。」

教師に言われて、生徒たちが声を揃える。

『あ』という字は、ほんまに難しいねえ、先生。』

『お』かて、たいがいやわ。』

『ら』なんか、釣り針にしか見えんがな。』

高齢の生徒たちが口々に訴えている。

えっ、とさやかは固唾を呑み込む。強烈な違和感があった。

「そうですね、五十音の中でも、『あ』は手強いです。」

教師はプリントを配りながら、けれど、と慰める口調で続ける。

『あべの』『あびこ』『あしはら』『あじがわ』等々、皆さんに馴染のある地名にも使われていますからね。しっかり覚えておきましょう。』

点と点をつなげば、「あ」という字になるよう工夫されたプリントなのだろう。生徒たちは背中を丸め、鉛筆の芯を舐め舐め、懸命に書き取りを始めた。

「平仮名さえ、こないに難しいんやで。漢字を読んだり書いたり出来るようになるんは、一体、何時のことやろか。』

「寿命があるんかねえ。」

あちこちで、切ない嘆きが洩れ聞こえた。

何で？ どうして？

スアンのようなニューカマーならともかく、普通の大阪のおっちゃん、おばちゃんが、何で今更、「あおぞら」なん？

ほんまに字い、読まれへんの？ 書かれへんの？ ほんまに？
違和感の正体は、そんな疑問だった。

「潤間さん。」

背後から呼ばれて、肩をぼん、と叩かれた。驚いて振り向くと、担任の江口が立っていた。

「識字クラスの授業を見るのは、初めて？」

問われて、さやかは深く頷く。そして江口先生に、教室の窓際に座る老女をそっと指し示した。
八十路近い女性が、一心不乱にプリントの「あ」という文字をなぞっている。

「あのひと……あの生徒さんは、私の祖母と同じ年くらいやと思います。けど、字が読めへんて……書けへんて……。」

あとは言葉にならず、言い淀む。

⑥ 戦争や貧困や病などで学校に行けなかった——そういう事情は見聞きして、充分に知っているつもりだった。けれど、まさか……。

声を失し、棒立ちになるさやかに、教諭は、

「これが、現実なんよ。」

と、平らかに告げた。

教室では、生徒たちが各々、プリントと格闘している。その授業風景に目を向けたまま、江口先生は声を落として、こう続ける。

「文字を読めない、書けない——そのことが、あのひとたちに、どれほどの過酷な人生を強いたのか。考えてみてね。」

あ・お・ぞ・ら

あ・お・ぞ・ら

再び、音読の音が廊下まで流れてきた。

「すべて国民は、法律の定めるところにより、その能力に応じて、ひとしく教育を受ける権利を有する。憲法二十六条では、このように。」

⑦ 社会科学の教科書を、担当教師の田宮がゆっくりと読み上げている。

二年三組の生徒たちは、教科書を目で追い、時々小さな声で唱和しつつ、「教育を受ける権利」について学んでいく。

⑧ あ・お・ぞ・ら

耳の奥には、先刻の識字クラスの生徒たちの声がこびりついて、消えることがない。さやかは教科書から視線を外し、そっと周囲を見回した。

中国残留孤児だった露子、在日の正子ハルモニ、ほかにも戦禍や貧しさのため、学齢期に学校に行けなかったひとたち。

今、当たり前のように机を並べているけれど、皆、識字から……あそこからスタートしたのだろうか。

国語、英語、数学、社会、理科。

中学で学ぶ五教科全てを、識字から始めて身に付けようとするなら、どれほどの根気と努力が要ることか。それでも学びたい、と思うのは何故だろう。その熱意は何処から生まれるのか。考えても、考えても、さやかにはわからなかった。

「先生、今日もありがとうございます。」

「はい、お疲れさま。気を付けて帰ってくださいね。」

午後九時過ぎ、無事に授業を終え、夜間中学の生徒たちは、疲れながらも晴れやかな顔つきで校門を出ていく。

そのまま夜勤の仕事に向かう者も居れば、家路につく者も居る。さやかは、遠見と正子ハルモニ、車椅子の介助者として駅へと向かっていった。

「そうか、江口先生とそないな話をなあ。」

吐息交じりに、遠見は呟く。

何処となく元気のないさやかを気遣い、遠見から何かあったか、と問われた。思い切つてスアンを迎えにいった先で見た光景、江口先生との遣り取りを打ち明けたさやかであった。

「わしも正子ハルモニも、識字から始めたよって、そらあ、大変やった。最初に教わったんが『つ』『く』『し』やったから、まだ何とかなった。けど、あれが『あ』やったら、とうにくじけてるやる。」

なあ、正子ハルモニ、と同意を求めて、遠見は切なげに瞬きをした。

「中国残留孤児やった落子さんは、それでも十歳までは日本語の教育を受けてはったよって、進級も早かったけど、わしは……。」

ゼロから始めてここまで来るのに六年かかった、と苦しげに遠見は話す。

「私は七年。七年かかったんよ。」

柔らかに、正子ハルモニが口を開いた。

「それでも奇跡に近い、と思える。何せ、読むことも書くことも、どっちも全く敵わなかったんやからねえ。」正子ハルモニの言葉に、車椅子を押していた介助者が深く頷いていた。

飲食店、ドラッグストア、金融業、コンビニエンスストア、等々。駅周辺の繁華街には、電飾で縁取られた看板が林立し、文字が洪水のように押し寄せる。

「こんなに文字が氾濫してるのに……。」

読めなかったら。

書けなかったら。

A
そんな、想像も出来へん、という台詞を、さやかはぐつと呑み込んだ。皆の歩みが自然に、遅くなる。

ポケットに、と遠見が自分の上着のポケットに手を入れてみせた。

⑨
「ポケットに、いつも包帯を入れてたんや。」

「包帯を？ 何で？」

さやかに問われて、遠見は気弱な笑みを浮かべる。

「仕事場でも役場でも何処でも、何かを『書け』と言われそうになると、手えに怪我した振りして、誰ぞに代わりに書いてもらうためやがな。」

遠見がポケットから手を出した。その掌に、丸められた包帯が見えるようだった。

私は、と正子ハルモニが声を低める。

「私は眼鏡やった。よう眼鏡を忘れた振りをしたんよ。代わりに読んでもらうためにねえ。」

——これが、現実なんよ。

※
江口先生の言葉が、その表情が脳裡にありありと蘇る。

——文字を読めない、書けない。そのことが、あのひとたちに、どれほどの過酷な人生を強いたのか。もしも、字が読めへんかったら……。

書けへんかったら……。

それが私やったら……。

⑩ 足もとが、大きくぐらりと崩れるような錯覚に襲われて、さやかは両の足を踏ん張った。そうしなければ、立ってはいられなかった。

駅の改札前で遠見と別れ、車椅子の正子ハルモニと介助者と一緒に、プラットホームに向かう。さやかは押し黙ったままだった。

何か用事を思い出したのだろう、介助者がホーム端の公衆電話を指して、「ちよっと電話をかけてきます。少しだけ待っててもらえますか。」

と断ってから、車椅子を離れた。

ラッシュアワーを過ぎたホームは静かで、次の電車を待つひとも、まばらだった。さやかは車椅子のハンドルに手を添えて、正子の隣りに立っていた。

駅名標、路線図、駅構内図、「終日禁煙」を始めとする標識、行先案内、等々。駅のホームには、大切な情報を記した表示が一杯あった。

もしも、一文字も読めないとしたら……。

B 蒸し暑い夜のはずが、背筋がぞくぞくと寒く、さやかは身震いをした。

さやかちゃん、と正子ハルモニは傍らのさやかを見上げる。

「朝鮮から無理やり日本に連れて来られた時、私は十二歳やったんよ。」

※ 母国語のハンガルの読み書きさえ、充分に出来なかった。

女工から始めて、働きに働いてねえ、と正子ハルモニは自身の手に視線を落とす。変形した指の関節、節

が高く、長年の苦勞が刻まれた手だった。

C さやかは相手の目の高さよりも低くなるよう、車椅子の傍らに腰を落とした。

正子ハルモニは、淡々と続ける。

「読み書きを覚えたくても、『お前に字いなんぞ要らん。働け。』と。皆、そない言うてねえ。一遍も学校へ行かせてもらわれへんかった。」

戦争が終わって、縁あって結婚し、家族にも恵まれた。

「字いを知らなくても、生きてはいける。けどねえ、子どもの通信簿もよう読んでやれんかったんよ。娘の不思議そうな、悲しそうな顔は、何十年経ったかて、忘れられへん。」

⑪ 当時は思い出すのか、老女の声が湿りけを帯びていた。

「文字を知らんから、何遍も騙されて。家も財産も全部、持っていかれたこともあったわ。」
今なら相談する窓口もあるだろうが、当時は泣き寝入りするほかなかったのだという。

「そんな……。ひどい……。」

⑫ かける言葉も見つからず、さやかは声を失するよりなかった。

友の受けた理不尽を我が身に置き換え、俯くばかりのさやかに、正子ハルモニはそっと手を差し伸べる。

「せやけどねえ、さやかちゃん。」

Y 友の皺だらけの手が、さやかの手をそっと掴んだ。

⑬ 「夜間中学で手に入れた文字は、もう誰も私から奪うことはできへんの。」

正子ハルモニの一言に、さやかは不意を突かれる。
ホームに、電車が到着する合図の音楽が流れて来た。

「お待ちさせて済みません。」

詫びながら、介助者が車椅子に駆け寄る。

「ほな、さやかちゃん、お休み。また明日、学校でね。」

掌にぐっと力を込めてから、正子ハルモニは、さやかの手を放した。

介助者と車椅子の同級生が乗車した電車が、ホームを滑り出る。遠ざかって闇に紛れたあとも、さやかはホームに佇んでいた。

友の温もりが、握る手に込められた力が、まださやかの掌に残る。

学校はおろか、文字さえも与えられなかった正子ハルモニ。

何もかも与えられながら、それを当然としか思わなかった自分。

——夜間中学で手に入れた文字は、もう誰も私から奪うことはできへんの。

あ・お・ぞ・ら

正子ハルモニの言葉に、識字クラスの授業風景が重なる。

ああ、とさやかは思う。

ああ、そうか、と。

『学び』とは、誰にも奪われないものを自分の中に蓄える、ということなのか。
誰のためでもない、自分のために。

自分の人生のために。

⑭ 「強いなあ、強いわ、ほんまに。」

思わず、声に出していた。

それに比べて、自分は何と「あかんたれ」なんやらか。

血を吐く思いで自身の中に蓄えたものなど、何一つないように思う。全て、当然のものとして受け取ってきた。

強くありたい。強くなりしたい。

D 正子ハルモニの感触が宿る掌を、さやかはぐっと拳に握りしめていた。

(高田郁『星の教室』より)

※(注)

中国残留孤児

戦前、戦中に中国大陸に住んでおり、第二次世界大戦終結にともなう引き上げの際に親と別れて帰国できず、中国大陸に残された子ども。

ハルモニ

朝鮮や韓国で年配の女性を呼ぶ丁寧な言葉。「おばあさん」の意。

ピカン

スペインで生まれた抽象画が有名な画家。

小籠包

うすい小麦の皮で具材とスープをつつんで蒸した中国の料理。

ニューカマー

戦時中や終戦直後ではなく一九八〇年代以降に日本にやってきて、長期間にわたって日本で生活をするようになった外国人の人々を指す言葉。

脳裡

頭の中。心の中。「脳裏」と同じ意味。

女工

工場で働く女性の労働者を指す言葉。

問五 — 線⑤「さやかにとっても、一年一組の教室を訪ねるのは、初めてだった。」とありますが、これについて次の1・2の問いに答えなさい。

- 1 「さやか」は何のために、「一年一組の教室を訪ね」たのですか。それを説明した次の文の
- | | | |
|---|---|----|
| I | ・ | II |
|---|---|----|
- にあてはまる言葉を
- | |
|---|
| I |
|---|
- は文中から五字以内でぬき出し、
- | |
|----|
| II |
|----|
- は十字前後で考えて答えなさい。

普段は

I

 において「さやか」たちと補食の時間を過ごしている

II

。

2 「さやか」の目にした「一年一組」の様子としてあてはまらないものを次のア・エの中から一つ選び、その記号を答えなさい。

- ア 「スアン」は平仮名を苦戦しながら学んでいる高年齢の生徒に交じって授業を受けていた。
- イ 一年一組で学ぶ生徒の多くは外国からやってきた生徒ではなくて年配の日本人であった。
- ウ 教師は平仮名の学習に弱気になっている生徒を身近な用例を挙げながらはげましていた。
- エ 年配の生徒たちは平仮名さえ覚えられないことで文字の学習に対する意欲を失っていた。

問六 — 線⑥「けれど、まさか……。」とありますが、このときの「さやか」の様子を説明した次の文の上十五字以内でぬき出し、

III

は十字前後で考えて答えなさい。

I

 という人びとがいることを知っていたつもりだったが、実際に

II

 という年配の生徒を目にして

III

。

問七 — 線⑦「二年三組の生徒たちは、教科書を目で追い、時々小さな声で唱和しつつ、『教育を受ける権利』について学んでいく。」とありますが、この場面が描かれていることで生じていると考えられる効果についての説明としてあてはまらないものを次のア・エの中から一つ選び、その記号を答えなさい。

- ア 法律で定められているにもかかわらず実際には教育を受けられない人が存在するという矛盾や問題点を目を向けさせる効果。
- イ ふだん明るく過ごしている「さやか」の「仲間」も「教育を受ける権利」を手に行きなかったのではないかと考えさせる効果。
- ウ 「教育を受ける権利」があるおかげで高齢になってからでも学校に通うことができる一年一組の生徒の幸運を強調する効果。
- エ 文字の読み書きができないということは憲法の保障する「教育を受ける権利」が奪われた状態だということ指摘する効果。

問八 —— 線⑧ 「耳の奥には、先刻の識字クラスの生徒たちの声がこびりついて、消えることがない。さやかは教科書から視線を外し、そっと周囲を見回した。」とありますが、このときの「さやか」についての説明として最も適当なものを次のア～エの中から一つ選び、その記号を答えなさい。

- ア 識字クラスの生徒たちの現実を知ったことで、いつも当たり前のように机を並べている「仲間」と自分の間に隔たりがあるように思っただけでさびしさを感じている。
- イ ともに授業を受けている「仲間」のこれまでの苦勞に思いをめぐらすとともに、困難を乗り越えてでも学ぼうとする理由がわからずに考えこんでしまっている。
- ウ 自分と同じクラスの「仲間」がこれまで過酷な人生を歩んできたことを知り、なんとかして助けたいとは考えるものの、良い方法が浮かばずに落ちこんでいる。
- エ 識字クラスの生徒たちの現実に対して担任の先生があきらめている態度を見せたことを悲しく思うとともに、それでも学ぼうとする生徒を気の毒に思っている。

問九 —— 線⑨ 「『ポケットに、いつも包帯を入れてたんや。』とありますが、これについて次の1・2の問いに答えなさい。

- 1 「遠見」は何のために「ポケットに、いつも包帯を入れて」いたのですか。文中の言葉を使って二十字以上三十字以内で答えなさい。
- 2 「遠見」のこの行動に関する描写からどのようなことが読み取れますか。次のア～エの中から最も適当なものを一つ選び、その記号を答えなさい。

- ア 数多くの文字が氾濫している世界の中で、読み書きができなくても人に助けられながら生きてこられたことは奇跡に近いということ。
- イ たとえ文字の読み書きができなかったとしても頭をつかって工夫をすることで、明るく前向きに生きていくことができるということ。
- ウ 文字は日常生活の中にたくさんあふれたものなので、読み書きができなくて困るとするのは本人の努力不足の問題であるということ。
- エ 読み書きできないというのは単に生活が不便になるだけではなく、隠したくなくなってしまいうほど人間の尊厳に関わるものだという事。

問十 —— 線⑩ 「足もとが、大きくぐらりと崩れるような錯覚」とありますが、このときの「さやか」についての説明としてあてはまらないものを次のア～エの中から一つ選び、その記号を答えなさい。

- ア もしも自分が文字を使えなかったら、文字を使う必要があるたびごとにどれほどの困難にみまわれることであろうかと想像して衝撃を受けている。
- イ ふだんの学校生活では明るく過ごしている「仲間」たちが、自分には想像できないほどのつらい経験を数多くしたのではないかと心を痛めている。
- ウ 自分には「遠見」や「正子ハルモニ」のように、数年の時間をかけてまでして文字の読み書きを学び続けていく学習意欲がないことに絶望している。
- エ これまで文字のあふれた世界の中で生活をし、読み書きできることを当たり前のことだと思っていた自分の中にある常識や価値観がゆらいでいる。

問十一 —— 線⑪ 「老女の声が湿りけを帯びていた。」とありますが、どういうことですか。次のア～エの中から最も適当なものを一つ選び、その記号を答えなさい。

- ア 「正子ハルモニ」はこれまで自分が経験してきたつらいできごとを思い出し、悲しみにしずんでいる。
- イ 「正子ハルモニ」は自分のことを理解してくれなかった周りの人に対し、怒りがこみ上げてきている。
- ウ 「正子ハルモニ」は文字を身に付けたことで自分の道が開けたと改めて感じ、感慨にふけっている。
- エ 「正子ハルモニ」は「さやか」を慰めようとし、自分の感情をおさえようと必死に平静を装っている。

問十二 —— 線⑫ 「友の受けた理不尽」とありますが、「友の受けた理不尽」の内容としてあてはまらないと考えられるものを次のア～エの中から一つ選び、その記号を答えなさい。

- ア 字を知らないせいで騙されて財産を全部持っていかれたこと。
- イ 日本に無理やり連れて来られて日本の文字を学ばされたこと。
- ウ 読み書きを覚えたくても学校に行かせてもらえなかったこと。
- エ 字が読めないために娘の通信簿さえ読んでやれなかったこと。

問十三 —— 線⑬ 「『夜間中学で手に入れた文字は、もう誰も私から奪うことはできへんの。』とありますが、「正子ハルモニ」が「夜間中学で手に入れた文字」を「誰も」「奪うことはできない」理由について「さやか」はどのように考えていますか。それを説明した次の文の□にあてはまる言葉を文中の言葉を使って十字前後で答えなさい。

「正子ハルモニ」が手に入れた文字は □。

問十四

——線X「正子ハルモニはそつと手を差し伸べる。」、Y「友の皺だらけの手が、さやかの手をそつと掴んだ。」、Z「掌にぐつと力を込めてから、正子ハルモニは、さやかの手を放した。」とありますが、これらの動作にこめられた「正子ハルモニ」の思いはどのようなものだったと考えられますか。次のア～エの中から最も適当なものを一つ選び、その記号を答えなさい。

ア 自分の過去に関係するつらい話をして「さやか」を暗い気持ちにさせてしまったことを申し訳なく思うとともに、文字が使えなかったことでかえって人の優しさにふれることもできたので「さやか」が落ちこむ必要はないという思い。

イ 読み書きができないことで経験してきた苦労を「さやか」が理解してくれたことに感謝するとともに、「さやか」は文字を身に付けているので、読み書きできずに生活することを想像しておびえる必要はないと安心させようという思い。

ウ 自分の過去の大変な経験を話して「さやか」に読み書きできないことで生じる過酷な人生について理解を深めてもらうとともに、「さやか」のように当たり前に読み書きができることのすばらしさや奇跡に気付いてほしいという思い。

エ 読み書きができない生活を想像して言葉を失っている「さやか」に対し、今の自分は夜間中学で文字を身に付けたことで希望を手にすることができたということを伝え、「さやか」にも学びを通じて前向きに生きてほしいという思い。

問十五

——線⑭『強いなあ、強いわ、ほんまに。』とありますが、ここでの「さやか」についての説明として最も適当なものを次のア～エの中から一つ選び、その記号を答えなさい。

ア たくさんのつらい経験を通じて『学び』の意味を見出して文字を身に付けた「正子ハルモニ」の根気や熱意に心打たれるとともに、何でも与えられることを当然のこととして生きてきた自分にはとてもまねをすることができそうにないという情けない気持ちにおそわれている。

イ 「正子ハルモニ」の波乱に満ちたこれまでの人生経験におどろくとともに、つらさや苦しさといった負の感情を言動に表すことなく前向きな生き方を貫いてきた強さに感化され、自分も強くなるために何でも与えてもらえる環境を捨ててしまおうという決意をかためている。

ウ 過酷な環境に置かれながらも学びを通じて自身の世界を作り出してきた「正子ハルモニ」を尊敬するとともに、与えられることが当然の環境の中で生きてきた自身の弱さや『学び』の意味に気付くき、自分も「正子ハルモニ」のように強くなるうという気持ちが生じ始めている。

エ 「正子ハルモニ」が『学び』を通じて自分の人生を切り開き、過去のつらい経験を乗りこえて充実した毎日を送っていることをうらやましく思うとともに、自分も夜間学校での『学び』を通じて与えてもらうことが当たり前前の環境に流されないようにしようと思立っている。

問十六　　線A「そんなん、想像も出来へん、という台詞を、さやかはぐっと呑み込んだ。」、B「蒸し暑い夜のはずが、背筋がぞくぞくと寒く、さやかは身震いをした。」、C「さやかは相手の目の高さよりも低くなるよう、車椅子の傍らに腰を落とした。」、D「正子ハルモニの感触が宿る掌を、さやかはぐっと拳に握りしめていた。」という「さやか」の動作についての説明としてあてはまらないものを次のア～エの中から一つ選び、その記号を答えなさい。

ア　Aの記述は自分の感想を口にすることで読み書きできずに生きてきた「遠見」や「正子ハルモニ」を傷つけまいとしている様子を表現している。

イ　Bの記述は読み書きができなかったとしたら車椅子の必要な「正子ハルモニ」は生きていけないのではないかと心配する様子を表現している。

ウ　Cの記述は過去の苦しかった経験を語りはじめた「正子ハルモニ」に敬意を表すとともに気持ちに寄りそおうとしている様子を表現している。

エ　Dの記述は「正子ハルモニ」の言葉に勇気をもって自分自身の人生のためにしっかり学んでいるように強く決意している様子を表現している。

二 次の漢字と言葉に関する問いに答えなさい。

問一 次の①～⑤の——線部のカタカナを、それぞれ漢字に直しなさい。

- ① モクハン印刷の絵が流通する。
- ② あの小説家はヨギとして切り絵を習っている。
- ③ 古代王国のコウボウについて調べる。
- ④ オアフはハワイシヨトウで三番目の大きさだ。
- ⑤ 注文の品が家にトドク。

問二 次の①～④の——線部の漢字の読みを、それぞれひらがなで答えなさい。

- ① 漢字から言葉の意味を類推する。
- ② 新緑の時季をむかえる。
- ③ 合成皮革のかばんを買う。
- ④ わたしの実家は本屋を営んでいる。

問三 次の①～③の漢字の組み合わせについて後の1・2の問いに答えなさい。

- ① 救急
- ② 道路
- ③ 年長

1 ①～③の漢字の組み合わせとして適当なものをそれぞれ次のア～エの中から一つずつ選び、その記号を答えなさい。

- ア 同じような意味を重ねているもの
イ 反対の意味を重ねているもの
ウ 上の漢字が主語、下の漢字が述語となっているもの
エ 上の漢字が動作を表し、下の漢字がその動作の対象となっているもの

2 ①～③に用いられているどの漢字の組み合わせとも異なるものを後のア～クの中からすべて選び、その記号を答えなさい。

- | | | | | | | | |
|---|----|---|----|---|----|---|----|
| ア | 気絶 | イ | 優良 | ウ | 開会 | エ | 必要 |
| オ | 勤務 | カ | 往来 | キ | 投票 | ク | 急行 |

問四 次の①、②二つの文は敬語の使い方にあやまりがあります。敬語の使い方が正しくなるように例にならって全文を書き直しなさい（あやまりのない部分は書き直してはなりません）。

例 父はいま家にはいらっしやいません。夕方には帰ると申しております。

【答え】父はいま家にはおりません。夕方には帰ると申しております。

① 先生がお作りになった解説プリントをおもらいになれますか。

② こちらの窓口までお越しになり、うかがってください。

